

# 中国の第三革命と日本

——一九一六年山東省における反袁運動を中心に——

ユリア リンス

## 1 はじめに

一九一五年から一九一六年七月までに行われていた反袁運動は、一方では孫文と中華革命党軍の活動を重視して「第三革命」と呼ばれる。他方進歩党人の梁啓超、蔡鍔、西南の実力者唐繼堯が果たした役割をむしろ強調して、「護国運動」・「護国之役」と呼称されることがあり、これはまた中国革命における孫文らの革命運動の評価と関連していると思われる。孫文は第二革命失敗後、一九一三年八月日本に亡命し、失敗の重要な原因が国民党内の分裂であったと考え、国民党をもつと統一された中華革命党に改組した。中華革命党は創立後すぐ共和国体を維持する目的を達成するため袁世凱政権を打倒する「第三革命」を準備し

始め、いち早く袁政権反対を組織したのである。革命党は旧国民党の海外支部を作り変え、やがて世界的な組織を持つに到ったが、中国国内に於いては、雲南省護国運動が勃発して初めて、孫文が重視していた軍事的活動を組織、展開することができたのである。鎌田氏が指摘しているように、「孫文ら中華革命党が単独で袁鬪争の主導権を握るということではなかった」<sup>1)</sup>のであり、アメリカに亡命した黄興や東京で成立した欧事研究会は孫文の独裁的革命指導ぶりに反対したが、袁世凱政権反対に関しては孫文ら革命党黨員に同意し、結局一九一五年後半から、反袁活動に関与した。ところが、一九一五年八月籌安会が公然として袁帝政を主張すると、この時まで袁と妥協していた梁啓超、蔡鍔らは袁に離反すると決定し、西南の唐繼堯と協力した。そして、一九一五年十二月雲南省から出発して西南に於い

て、旧進歩党・旧国民党関係者・西南軍閥の連合による討袁内戦が始まったのである。最近の中国大陸及び台湾の研究ではこの運動が革命党による反袁活動に決定的な影響を与えたと考え、護国運動の規模と勢力を考慮して、当時の内戦を「護国之役」・「護国運動」と称する傾向が見られる。しかし、「第三革命」の存在を否定することは不可能であり、ここでは二つの運動が共存しており、一面では互いに影響を与え合い、一面では両者の間に緊張関係があったと考えて良からう。<sup>2)</sup>ところが、孫文、革命党の第三革命、護国運動、梁啓超など旧進歩党人の重要性の問題は、依然として議論の多いところであり、本稿で山東省に於ける反袁活動の性格、主体力、護国軍と中華革命党との関係、革命党の役割についても考えて行きたい。

一九一四年第一次世界大戦が始まると、日本は同年八月十五日ドイツに対して最後通牒を提出してドイツが膠州湾租借地を無条件で日本官憲に明け渡すよう要求したが、ドイツがそれを拒絶したので、八月二十三日対独宣戦した。青島は二カ月の交戦後、十一月に陥落した。日本軍はドイツ軍が十一月七日投降した後、十日に入城し、二十七青島守備軍司令部（神尾中将司令官）を設立した上、神尾指揮の第十八独立師団が龍口から上陸し、膠濟鉄路線を占領した。中立を宣言した中国政府は上陸地点及び日本側が要求

した中国除外地域の広大さに対して抗議を提出したが、しかし、同盟国イギリスの同意を背景に、日本は脅迫により袁政府に日本が求めていた濰県以東の交戦地域範圍を承認させ、更に上陸した後、この協定を破り、濰県以西へ進出し、膠濟鉄道全線を占領したのである。中国政府の対日批判はこれにより益々強まってきたが、大戦の勃発にもよる財政収入の減退、反袁意見・反袁活動の普及等、様々な難境に面していた袁政権は日本の圧迫に抵抗できなかったのである。日本ではその時すでに、小川平吉、内田良平等が提案したように袁世凱を日本の要求に譲歩させるため、革命党やそのほかの反袁勢力を利用し、あるいは袁を倒して、日本軍によって秩序を回復し、親日の政権を建設させ、日中国防条約を結ぶという意見が主流であり、日置公使は早くから袁政府に「日韓義定書のような内容の要求」<sup>3)</sup>を提出すると主張した。しかし大隅内閣は暫定的に袁世凱の苦境を利用し、袁政権を支持すると言い、同時に袁に日本の要求を受け入れさせる政策を採った。日本軍が青島を占領した後間もなく、一九一五年一月十八日、東京で要求案を受け取った日置公使は悪名の高い「二十一条要求」案を袁世凱に提出した。当初日本政府の要求を激しく拒んだ袁世凱は帝制復活には日本の承諾が必要であると考えて一九一五年五月九日、「二十一条要求」を承諾した。そして

共和制を廃止して、帝制運動を開始させた。ところが、中立的態度から次第に帝制反対へ転化した大隅内閣は十月帝制実施延期するように勧告し、米英などの列強と行動を調整するため交渉した結果、英米露仏諸国も共同で袁政府に帝制延期勧告を提出したので、国内の反対に直面した袁世凱を一層困難な状況に陥らせたのである。

## 2. 中華革命党軍東北軍と日本

### 2. 1 中華革命党東北軍の背景と組織

中華革命党の創立会が一九一四年七月八日、東京築地精養軒に行われた一ヵ月後、黨員数は既に六九二人まで増えてきたのであるが、その中には日本人の黨員もいたと言われている。『中華革命党研究』によれば、専門家の知識を利用して、日本の支持を得るために本部に顧問機構があり、そのメンバーとして宮崎滔天、萱野長知のほかには犬養毅、頭山滿、古島一雄、前川虎蔵、島田経一、菊地良一、寺尾亨が革命党に参加したが、しかし同盟会および国民党と異なつて革命党には日本人が入党し得ないことになつたという説もあり、彼らはむしろ非公式な形で関与したと思われる。革命戦略については、中華革命党では軍事任務は特に重視され、孫文は党の創立後、一九一四年九月から十二

月にかけて十七回、赤坂靈南坂頭山満邸において方略研究会を召集し、ここで軍事計画をも討論させた。討論した結果、革命党本部は党の総理、つまり孫文を全国軍事行動を監督、指揮する中華革命軍大元師に決め、軍律軍法、軍政府、徵発、そのほかの規則などを規定した<sup>5)</sup>。次いで総務部長陳其美と軍事部長許崇智は各省司令官を推薦し、孫文の確認後、選ばれた人物は各省へ派遣され、倒袁軍事運動従事任務が与えられ、そこでは省のレベルを越えて、東南軍(長江方面、陳其美責任者)、西南軍(広州、胡漢民)、西北軍(陝西、于右仁)、と東北軍(山東、東三省、居正)の編制が企画された。

東北軍の活動範囲は山東省のほかには東三省と河北にまで及んだものの、組織された活動は主に山東省に於いて行われ、また山東省の倒袁運動も南中国各省より遅れて展開したのである。当時中国各地では既に袁に反対する暴動が発生していたが、数多くの武装蜂起にもかかわらず、その結果は小さく、袁世凱を心配させるに過ぎなかつたと言われている。ところが、一九一五年、袁世凱帝制計画に大義名分を付けるために組織させた籌安会が八月、この計画を公然として主張すると、全国に倒袁運動が広がって来たが、革命軍は時期に乗じて、上海、広東、陝西、四川、江西各省においても倒袁活動を行ったのである。

しかし、中華革命党は北京に近い北方、特に袁世凱のヒンターランドとも言われていた山東省を重視したにもかかわらず、この地域は革命にとって「後進地域」とも言うべき状況にあつた。そこで一九一五年一月五日中華革命山東支部は設立され、劉光はその部長になり、居正は東北軍總司令官に任命され、真隸、山西、山東において軍事を進行するよう努めることになったのである。同年十月山東方面では呉大洲が山東司令官を委任されたほか、東北軍新司令官九人と招撫使二人が革命党の任務を受けた。

## 2. 2 日本人参加者について

一九一五年居正は中華革命党東北軍總司令になった後、翌年三月大連に到着してから、東北軍を組織し始めた。居正と大連で会合した黨員、朱霽青、陳中孚、劉廷漢などは青島へ渡り、次第に東北軍の司令部を設立し、軍隊を編制していた。当時は第一軍隊（劉廷漢司令）、第二軍隊（朱霽青司令）、六つの支隊および陳中孚司令の予備隊が組織され、すべての軍隊は濰県攻撃隊、寧兌遊撃隊、濟南潜入隊の三つの部隊に分配された。その中、濰県攻撃隊は最も徹底的に組織され、電信破壊隊、ガス隊、炸薬隊、衛生隊及び給養課、運送課、兵器課があつた。このような東北軍の組織は完成されていたように見えるが、しかし特に最初

は兵士が不足下状態であり、確かに各隊各課に日本人が入つたとはいえ、確実な数字など、個人の参加に関するデータは欠けているようである。以下は資料的に裏付けられる坂本寿一の航空隊と萱野長知（一八七三年—一九四二年、高知市生まれ、いわゆる自由民権派傾向「支那浪人」の代表的な人物）が参加していた青島司令部について検討することにした。

### 2. 2. 1 坂本寿一の航空隊

個人の参加のほかに革命軍東北軍に雇われていた部隊、つまり革命党顧問及び飛行機隊總司令坂本寿一に指揮されていた航空隊があつた。坂本は一八九〇年山口県柳井生まれ、一九〇七年山口県立工業学校を卒業した後、翌年ロサンゼルス<sup>(1)</sup>の国立工業カレッジ自動車科に留学しており、卒業後フォールド自動車工場に就職し、同時に三十馬力エンジン付きの飛行機を自作した日本航空界の先駆者の一人である。坂本はザ・カーチス飛行学校で勉強し、一九二二年飛行免許を獲得した後、一九一四年、自作の飛行機を持って帰国した。

坂本は東京でやがて梅屋庄吉<sup>(2)</sup>と知り合い、特に梅屋関係資料により坂本の山東省革命運動に於ける活動を検討できる。航空を大陸において発展させようとした坂本は梅屋に

よつて孫文に紹介され、一九一六年二月七日より数回孫文と会談した。孫文は飛行機を有利な武器として投入しようと考え、早速杭州で飛行場と飛行学校を設立するよう提案し、それを坂本に頼んだ。坂本とその相棒に任命された戴天仇は、先ず計画された飛行学校の学生を募集し、面接の上四十七人を選んだ。しかし、杭州に学校建設を計画したが、中国内政状況のために革命黨員が中国国内で学校を開くのは不可能であつたので、日本で開校することにした。

梅屋は滋賀県近江八日市町沖野ヶ原の役人、町長などとの交渉の結果、土地を借りることが出来、まず格納庫を建設させた。そして「中華革命党近江八日市飛行学校」は一九一六年五月四日から練習を始め、四十七人の中国人学生と坂本などの教員は八日市町で下宿した。

これより先、一九一六年四月二十五日、革命党の軍務部長周応時<sup>10</sup>と坂本との間に「飛行教授契約」が結ばれた<sup>11</sup>。この契約は学生数（十人以上）、学費（一人当たり一千元）を決定し、教授期間は六ヵ月であり、必要に応じて教授期間延長を可能としたが、期間中坂本が一切の費用を負担すると決めた。革命党側は十人の学費全額を三回に分けて交付し、更に中国へ行く場合に相当の報酬を支払うと約束した。

四月末学校では訓練が始まったが、坂本の五月十二日梅

屋宛の書簡によれば、自転車にさえ乗つたことのない学生は先ず、そのために購入した自転車で練習し、その後、梅屋庄吉の自動車に乗り、訓練を受け、五月二十一日から生徒の単独滑走練習が既に始まつたと報告した。坂本は同報告の中で学生が熱心で、成績が良いと誉めた<sup>12</sup>。しかし、五月十八日、陳其美が上海で暗殺されたので、山東省での革命派は苦境に直面して、飛行学校を中国に移し、革命軍に飛行機を加えようと提案し、東京の梅屋と連絡を取つた。梅屋に頼まれて上京した坂本は最初、学校の移転に不賛成であつたが、革命成功の優先を説いた梅屋に説得され、中国へ行くこと決心したのである。

坂本が準備のため八日市町に帰っていた間、六月六日袁世凱が病死し、黎元洪は旧約法を回復したものの、山東省に於ける革命運動はそれからむしろ激化したので、革命派は坂本の飛行隊の参加を急いだ。六月二十八日に約百名の学生と整備員が神戸を出発し、船に積んだ飛行機二台、坂本自身の一台のほかは牧野整備員が扱っていた故萩田常三郎所有のモーター・ソルニエ単葉機一台、を持って山東省へ渡つた。濟南林領事の報告によれば、坂本らは七月二日青島に入港し、坂本は同日すぐ日本軍山東軍司令部へ挨拶に行き、翌日彼らは濰県へ移動し、濰県城外の畑で基地を設けたという<sup>13</sup>。この時濰県城内には中国官軍が守城し、革

中国の第三革命と日本——一九一六年山東省における反袁運動を中心に——

命軍は濰県城を包圍していた。

航空隊はそこで飛行機二台を組み立ててから、八月初頭より爆弾攻撃を行い始めた。ところが、濰県城はやがて引き渡されることになり、九月二十一日平和条約調印後、航空隊は解散するよう命令された。解散の際、中国人の飛行隊長夏重民は十一月十五日、坂本及びほかの日本人教師三名、整備係六名に四ヵ月分（坂本）或いは三ヵ月分の給料、三百元の帰国費、合わせて四千元の解散費を与えると請願した。周は更に中国人隊員十五名、通訳係、書記、雑役人、水夫、子供などの給料のほか、八日市町での経費、隊長の旅行費合わせて六千元を解散費として求めた。しかし、坂本によれば、結局夏重民の請願と異なって、二万元の解散費は半分ずつ中国人と日本人に分かれていたと言い、実際に払われていた金額は不明である。車田氏の分析によれば、濰県包圍の際、航空隊爆弾攻撃は、手作り爆弾の破壊力が大きくなかったにもかかわらず、効果は極めて高かったという。

航空隊の日本人隊員はその後帰国したが、坂本は残務整理員として十一月二十七日まで山東省に滞在し、自分の飛行機一台を北京政府の交渉者曲同豊に売り、扱っていたモーター・ソールニエ機一台のみを日本へ持ち帰った。杭州で飛行学校を建設する計画はその後にもあったようである

が、実現されなかった。またその後の坂本に関する事実は今全く知られていない。

## 2. 2. 2 萱野長知と青島の東北軍司令部

一九一六年三月青島では参謀処、副官処、秘書処、経理局、糧食局、軍機械課から構成された東北軍の総司令部が設けられた。司令部の幹部は殆ど山東省の人物ではなく、外から来たのである。総司令長の居正は湖北広済人であり、一九〇五年日本に留学し、日本大学法学部などで勉強し、中国同盟会員であった。第二革命失敗後、居正は妻と共に日本へ亡命し、一九一四年七月中華革命党に入り、党務部長に任命された。同年九月十日居正夫妻の五女が東京で生まれたが、亡命者の難しい状況を考慮して、子供がいなかった萱野は居正の娘を養女にした。居正は東京で『民国』雑誌の経営を担当しており、恐らく萱野の通信社とも関係があったと思われる。また二人の友情は萱野が山東の倒袁運動に参加したの一つの原因であったかに見える。萱野のほかに青島が集まってきた日本人は、例えば中華通信社員でもあった白井堪助、萱野の旧友平山周、岩崎英精などのいわゆる支那浪人であった。

旧ドイツ租界の住宅地で総司令部を設立してから萱野、居正らの司令官は山東拳兵行動を計画し、先ず濰県を襲

い、それから中心的に膠濟鉄道沿線を扼し、済南へ移動占領した上、山東省制圧し、中原へ拡張することを目的にしていた。<sup>18</sup> 萱野は一九一六年四月①山東革命行動計画、②山東革命行動要領、③済南ニ於ケル革命行動計画、④濰県ニ於ケル革命軍行動計画、⑤各部隊人名表（四月二十日）を日本文で記録したが、この資料をもとに具体的な計画のほかに、萱野が考えた日本軍及び日本人隊員と革命軍との関係はより明白に見られる。<sup>19</sup>

萱野の記録によれば、革命派は上述した目的を達成するために詳細な行動計画を立て、計画実施を二期に分けて行おうとした。東北軍は、第一期で、土地の重要性を問わず、成功の見込みが充分にある地域に於いて決行し、各地攻略部隊を派遣するほか、二十三日中央本部より日本人参加の多い電信破壊隊を差遣し、中国官憲軍隊の通信を遮断すると計った。そして、二十四日兵器及び衛生材料を輸送し、夜間ガス実験や電信破壊を実行した後、翌日濰県攻撃を執行しようとしたと言う。この資料によれば、濰県攻略部隊は日本人約三百人及び山東人兵士から編制され、済南攻略部隊は約六百人の日本人のほかに、主に居正派兵士から編制されていたが、山東人の呉大州派の兵士も入っていた<sup>20</sup>。第二期では済南を占領した上、津浦線を革命派勢下に置き、天津方面の革命派と連絡すると同時に中国官

憲軍の北進を拒止し、独立を宣言しようと計った。

萱野は、山東独立後の計画について、革命派が新政府・新行政機関を樹立する際、新しい機関を新来の人から編制するのは理想的であるとはいえ、不可能であるので、在来（山東省）の官吏もしくは「在野有志について親日の意思を持ってゐる人物を採用する」方針を採ると記した。

萱野は総司令官の任務は、一つは、現地で行動を統率し、もう一つは、青島に止まり、輸送業務を担当し、独立宣言を準備すると書いたが、萱野自身はむしろ青島において活動したようである。各部隊の行動、兵器の輸送、武器数などの計画を詳細に記した萱野は日本参加の具体的な形についてあまり詳しく述べていない。しかし、革命軍「禁令」の項目では次のように書いている。

「一、日本軍隊ノ命令ニハ絶対に服従スル事

二、革命軍ニハ属スル日本人ニハナルベク支那服装ヲナシ或いは洋服ヲ着用スルモ決シテ日本軍人ニ類スルカ如キ服装ヲナスヲ禁ズ

三、日本人ハ勿論外国人ノ生命財産ニ危害ヲ及スガ如キ行為ハ絶対ニ避クベキコト又

支那人ト雖モ敵対行為ヲナスモノノ外ハ一切殺傷スベカラズ又掠奪ヲ禁ズ

四、日本鉄道通行ハ之ヲ保護シ決シテ交通通行ヲ妨ゲ

中国の第三革命と日本——一九一六年山東省における反袁運動を中心に——

ルガ如キ行為□□ベカラズ

五、革命軍の行動ニ□同シテ掠奪行為ヲナサントスル  
土民ノ行為ハ敵ニ之ヲ禁シ以テ革命ノ行動ノ正々  
堂々タル行為ヲ一般ニ知ラシムルヲ必要トス<sup>21</sup>

以上の禁令は掠奪、外国人保護などについて大体中国側の資料で見られる革命軍方針と一致しているものの、萱野の記録を見ると、革命軍は日本の利益を保護しようとしただけではなく、積極的に日本軍の協力を求め、日本軍に服従しながら、日本軍人と取り違えることや日本軍に委任されて騒動するように見えることを妨げようとし、全く日本側に都合の良いことを考えたように思われる。

萱野らは日本守備軍軍人を募集しようとしたが、守備軍参謀はそれに反対し、募集活動は失敗したようであり、結局革命党東北軍に個人として入っていた日本人は報酬を得る庸兵であつたかに思われる。革命運動に参加した日本人「支那浪人」は日本側からも騒動の煽動者と非難され、特に一九一六年七月山東省の事情を視察し、「革命騒」を調査していた西原亀三は日本人活動家のために「今後日本の国交上非常ナル支障ヲ来スコトナキカヲ憂慮スルモノ尠カラズ」と彼らを批判していた。<sup>22</sup>

## 2. 2. 3 日本陸軍の態度——山東省を中心に

大隈内閣は袁世凱帝制実施に対して次第に反袁政権の方針を採つたが、陸軍内でも倒袁への傾向が支配的になり、一九一五年中国を日本の勢力範囲に入れようとした参謀次長田中義一は倒袁主張の中心的な人物であつたと言われている。<sup>23</sup> 陸軍に派遣され、滿蒙挙事に関与した土井市之進、小磯国昭及び民間人として活動した川島浪速はよく知られているが、山東省方面には陸軍の中国通でもあつた貴志弥次良が居り、更に萱野の友人石浦大佐は青島守備軍第四十旅隊長に就任したのである。

田中義一、寺西秀武などの日本政府は早く倒袁の方針を確定すべく主張に対して浜面又助は一九一六年一月の「对支意見書」の中で日本は「帝政ノ延期ヲ勧告セシ主旨ト支那現況トニ鑑ミ、当分帝政ノ承認ヲ与ヘス、其之ヲ与スルノ時期ハ帝國政府之ヲ保留」して「必要ト認めレハ自衛ノ手段ヲ取ル」と言いながら、日本はしばらく中立的態度に在るべしと論じていた。

また、この時期は革命派を利用しようとする考え方が広がつて来たので、陸軍内部には確定した意見がなかつたのである。寺西の上原勇作参謀総長宛書簡によれば、当時日本との与論はすでに倒袁に傾き、「陸軍下級者も概して倒袁を主張し、ただ上級者のみは意向を定らず、その為めに方針決定を躊躇せらるゝ」というような状況であつた。<sup>24</sup> 革命

派反対の声もあり、陸軍内部の意見不一致が続いていたが、日本政府態度の変化と伴って革命派に有利なる意見が、段々支配的になつたのである。

山東省においては、一九一六年三月七日、日本政府が交戦団体を承認し、民間有志者の革命援助活動を公然として奨励する責任を取らず黙認することを決定した後、青島守備軍は革命党東北軍が兵器の輸送のため山東鉄道を利用し、革命軍兵士が付属地に逃げ込むことを許容したが、依然として、日本軍人と革命軍との直接な関係を否定したのである。<sup>25</sup>

袁世凱政府は度々、日本の対革命派好感に反対したが、山東省に関しても日本軍の革命援助に対して抗議を提出したのである。たとえば、一九一六年五月四日袁軍が濰州城を包囲した時、跳弾のため日本守備兵や日本居住民の死傷が発生したので、石浦は七日張樹元を訪問し、「官兵暴乱」を戒めるよう請願した。それに対して袁政府代理外交総長曹汝霖は日置駐北京公使に日本兵は革命を助け、石浦は張樹元に独立を勧告し、開城を迫り、国交を妨げると言い、抗議を提出した。石井外相は石浦大佐の行動について、「(一)山東鉄道ニ依リ故意ニ土匪又は武装セル者ヲ運搬シタルコトナシ。(二)日本軍隊ト支那軍隊トヲ接近セシメサル様スルコトハ、素ヨリ異存ナキニ付、帝國政府ニ於テ

史苑 (第五四卷一号)

当該軍憲ニ必要ノ訓令ヲ発スヘシ。(三)日本人ヲ土匪中ニ混入セシメタル様スルコトハ、現ニ嚴重取締居ルモ、山東現下ノ状態ニ鑑ミ尚充分手配スルノ考ナリ。尚濟南ニ於テ貼付セル布告ノ件ハ、吳大洲ノ何人タルヤハ承知セサルモ、兎ニ角匪徒側ニ於テ勝手ニ行ヒタルコトニテ、日本ノ関知スル所ニ非ス。又日本軍力支那軍隊ニ対シ、宣戦ヲ行ヒタルカ如キ事実ハ断シテ之ナシ。」と日本軍は中立の態度を守ると断言した。<sup>26</sup>ただ事実上、青島守備軍が革命軍の山東鉄道利用を黙認したことだけは革命派に大いに助かり、運動を可能にしたかも知えられる。

中立態度を示した石井外相に対して、田中義一はより積極的な政策を主張し、「去リ乍ラ支那ノ情况ノ推移ニノミ追隨シテ我政策ヲ行フノミテハ、目的ヲ達スル能ハズ。寧ロ我ヨリ進テ情况ヲ作り出ス考ヘナカル可ラス」と論じていた。田中は山東省に於いて準備を必要とし、兵器輸送の場合に森岡守成少将の「暗助」を期待したので、陸軍本部はそれに応じて、むしろ青島守備軍の黙認や民間人の援助活動を歓迎したと思われる。<sup>27</sup>

斬將軍側は日本軍の革命派に対する好感にもかかわらず、しばしば日本軍と話し合い、独立を宣言する場合、日本の仲介を求めたのである。斬將軍は一九一六年五月十七日林領事と面談し、日本政府は革命の取締を嚴重にしてく

れば、山東省は「多少ノ利益ヲ日本ニ提供スルモ辞セス」と申し出たが、同様のよう提案を北京駐在武官公府顧問阪西にも出した。しかし、阪西は利益を得ても、革命派に対して取締を行うのは得策にあらず、さらに青島守備軍參謀張森岡少将と直接に交渉する必要があると断つた。森岡少将は靳將軍の提案に賛成せず、靳將軍もまた北京の現状を知つた上、独立に傾くと同時に革命派緩和の方針を採つたのである。<sup>(28)</sup>しかし、袁軍と日本軍とが対立し、阪西は北京から濟南へ来て、兩軍の間に仲裁する必要もあつたといえ、濰県開城交渉の場合、岡田中尉と石浦連隊長が袁軍と革命軍との間、仲介の役割を果たしたのである。

### 3. 山東拳兵

#### 3. 1 一九一四年——一六年に於ける拳兵準備

青島の總司令部を設ける前、山東省では既に袁世凱政權に反対する活動が行われていた。第二革命失敗後、山東出身の劉大同、薄子明（兩者は辛亥革命前からの中国同盟會員）、吳大洲、鄧天乙、邱子厚などは大連へ避難し、「樞密院」を設置し、沈曼雲を都督にし、劉大同は總司令官に就任した。彼らは一時武装蜂起を計つたが、日本軍に弾圧されて、運動は四部に分かれ、解散した。その後、劉大同は

一九一三年十一月日本に渡り、吳大洲も国民党の協力を求めるために同年十二月東京へ行き、東京で孫文の命令を受け、一九一四年一月大連へ戻り、薄子明などと共に山東支部（後中華革命党山東支部）を設立した。劉大同は新しい組織の支部長、吳大洲は總幹部となり、鄧天乙は政治、李統球は軍事担当者に選ばれた後、彼らは政略計画を立てた。

一九一三年九月山東省都督になつた靳雲鵬<sup>(29)</sup>に嚴重に圧迫され、劉大同、吳大洲らは、運動を進めることができず、日本の黙認を得るために孫文に影響力のある人物を大連へ送るよう請願したのである。そして派遣された陳其美は一九一四年四月、劉大同、吳大洲と会談し、劉統一を関外での運動に、劉大同を山東の運動委任したが、劉大同はまず関外に於いて凡そ五十人の部隊を編制したのである。<sup>(30)</sup>この時機、山東省の倒袁運動は分派に分裂し、中では吳大洲、薄子明の一派が最も重要であつたと思われる。第一次世界大戦が勃発すると袁世凱を支持したドイツは革命派を抑圧する余裕がなくなり、吳大洲、薄子明らは好機に乗じ、蜂起するために青島へ戻つた。山東の倒袁運動はそこで初めて日本守備軍の暗黙援助を得て、武器を購入輸送したといわれる。そして一九一五年二月十六日吳大洲、薄子明の一派は青島より膠県へ到着し、そこで袁軍と戦つたが、優勢

な官軍に破られたのである。また一九一五年四月、薄子明に指揮されていた山東省革命党々員の一部は上海の製造局攻撃に参加し、警察総局を攻撃したが、再び装備不足のため後退せざるを得なかった。上海での失敗直後、呉大洲、薄子明、呂子人などは、山東省に帰り、濰県及び周村の師団を組織し始めた。<sup>32</sup> この新しい運動に対して靳將軍は警戒を一層嚴重にし、南よりの郵便物、停車場、料理店、宿屋などを厳しく監視させたのである。

山東將軍は一九一五年十二月十七日統率処より「乱党ハ二種ノ計画ヲ立テタリ、一、軍警ヲ煽動シ匪徒ト連絡スルコト、二、暗殺団ヲ組織シ謠言ヲ放チ人心ノ離叛ヲ策スルコト」という消息を得たが、確かに山東の泰安県に根拠地があつた匪賊の頭目莊文学などは江蘇省海州白宝山の部下と連絡し、両省の境界地域を中心に煽動を行おうとし、一月二十八日青島へ向かい出発した。彼らは武器を多少隠匿していたので、日本軍は同地方に騒動が発生すると分かつたという。また青木はこの土匪部隊が今回「革命」の名を借り、実は略奪を目的とし、警戒を要すると判断したのである。<sup>33</sup>

靳雲鵬將軍は西と南の土匪の騒動のほかに、革命派が第一革命当時と同様に山東東部、芝罘方面に於いて煽動するのを恐れ、一九一六年一月中旬から兗州駐屯混成旅第二連

隊の一營、二月九日更に一營と歩兵一部と共に萊州へ移動させ、同時に、濰県に部隊を集結した。袁軍の第五師の第十旅と特科隊は以前から既に濰県や萊州方面で駐防していたが、この時在濟南第十七団の一營及び砲兵一連、工兵輕重兵の一部も濰県へ移つた。靳將軍は北京政府に張樹元師長が山東省東部における彈圧任務の名義を与えられ、同地方の諸軍を統率し、地方防御の任を司らしむると求めた。<sup>34</sup>

しかし、北京政府は各省の兵士より「精兵」部隊を編成し、四川・湖南省前線へ派遣し、むしろ山東省から軍隊を撤退させる必要があると考え、靳雲鵬の要求に応諾せず、三月一日から山東省内に於いて新兵を募集し、編成し始めたのである。<sup>35</sup> 南中国での動乱はこの時まで山東省に影響を及ぼさず、一九一六年二月末革命派が濟南で雲南政府布告などの印刷物を散布すると、軍警の警戒は厳しくなり、市内は緊急事態法令施行と同様の状態に陥つたと言われ、山東に於ける倒袁運動はこの時から緊急段階に入ったようである。

居正は三月萱野と共に大連に到着し、陳中孚、劉廷漢などの黨員を招集し、青島へ渡つた後司令部を設け、軍隊を編成し始めた。当時の中華革命党東北軍は第一軍隊（劉廷漢司令）、第二軍隊（主齊青司令）、第一支隊（薄子明）、第二支隊（馬海龍）、第三支隊（呂子人）、第四支隊（杜仲

三)、第五支隊(趙中玉)、第六支隊(尹錫五)及び陳中孚に指揮された予備隊から編成され、上述したように濰県攻撃隊、寧兌遊撃隊、濟南潜入隊に分かれていた。更には総司令直屬、九三人の華僑義勇団があり、その隊員は主に広東出身で、国民党、または中華革命党關係者が多かったのである。運動の指導者は外来者であったとはいえ、支隊司令官レベルでは山東省出身者が大多数を示し、尹錫五は關外の土匪頭目であり、山東人の薄子明、趙中玉、呂子人も土匪と關係を持っていたと言われているが、兵士も殆ど山東人であった。革命軍各隊最初の人数は不明であるが、敵軍、革命軍の勢力及び財務を調査した吳大洲の報告によれば、各州では五、六千の部隊もあり、五、六百の部隊もあったという。ところが、その中には東北軍に直屬しなかった部隊も含まれており、全部合わせて二万五千人が運動に参加したようである。<sup>(38)</sup> 革命軍關係の部隊は海州、沂州、兗州、徐州、曹州、東昌、青州、登州に集中したが、同時に兗州、沂州、曹州の土匪は再び動乱を起こした。山東將軍は止むを得ず、部隊を派遣し、濟南省城の勢力が薄弱になると、革命軍が機会に乘じ、攻撃することを恐れたので、北京政府に援助を依頼したのである。この時北京から派遣された諮議官周始祥は山東省の革命党が意外に深い根底を持つてっていると報告した結果、袁政府は緊急軍事會議におい

て軍隊を濟南へ派遣すると決定したが、更に省内軍隊の監督を厳しくし、日本人に対する事故が日本軍の自由行動の口実になることを恐れ、このような事件の発生を戒めたのである。<sup>(39)</sup>

三月末肥城県で発生し、北方黄河右岸に波及していた人民租税反対暴動により、靳雲鵬將軍は一層不利な状況に陥った。山東财政厅はこの時期各県に於ける各種雜税の徴収を商人に受負わせ、商人の土地面積測定の苛酷さの為、住民の間に不平が広がっていた。三月二十四日県衙門の前に民衆が集まり、デモを行ったが、衙警備隊に解散され、死傷者が出た後、暴動が発生した。<sup>(40)</sup> 四月から青島付近の革命派勢力が拡大し、当地官民の反袁意見が盛りあがった為、靳雲鵬の態度が揺らぎ始めた。四月十日靳は高級文武官に独立に関する意見を求め、會議を開いたが、秩序維持のために未だ独立せず河南、江蘇、安徽三省と行動を共にすると決定しており、山東省の独立に対する態度は単なる時期の問題になつていた。<sup>(41)</sup> また、將軍府參謀長王学産は貴志大佐を訪問し、革命党との關係を緩和し得るの方法について相談し、貴志大佐の仲介を求めた。

ところが、靳將軍はこの時、相変わず、居正派に対して強固な態度を示した。四月十九日居正は東北軍總司令の名義で、山東將軍の辞職と、全ての武器の革命軍への譲渡

を勧告した。更に「我軍は極めて強力の毒ガスを携帯し既に濟南城内外秘密に布置してあり、一度爆発せば人畜皆斃る」と脅しながら、山東人民生命、財産及び地方公共の治安は革命軍司令部が完全に責任を取ると言い、三日以内に青島八幡町四号地、萱野伝交中華革命東北總司令居正宛に回答するよう要求した。<sup>(43)</sup> 靳雲鵬はこの要求に対して在北京日置公使に電報を打ち、日本青島守備軍司令が居正などの革命党員を逮捕し、山東省地方官に引き渡すよう求め、治安を維持するために日本の協力を期待し、二十三日貴志大佐を招き、時局問題について談話し、妥協的な意見を述べたのである。

革命軍のこの脅迫のために、住民の間に革命派に対する反感が広がり、旧進歩党や旧国民党関係者は靳雲鵬の妥協提案に応じて話し合いを行ったが、靳將軍は自己の地位を守るため更に、馮国璋、張勳とも連絡し、四月二十四日文武官吏商務總會代表、民間紳士、新聞記者を招集した會議に於いて、各省將軍巡按使が連合して南北の妥協を謀り、責任内閣国会開設などに関する条件について既に同意しており、全国平和、山東省秩序を治めるべしと將軍府の立場を説明していた。<sup>(44)</sup> 難境にあつて靳雲鵬はそのほかに、山東省の治安は山東人が治めるべしと言い、吳大洲をさえ寝返らせようとした。倒袁運動内には確かに外部からの指導者

の優先を巡つて対立が発生したが、靳將軍の試みは失敗したのである。革命軍は却つてこの時、山東東部の各地に根拠を確定し、更に多数の革命党員が濟南に潜入し、人員の配置を完了し武器調達のために日本を奔走した結果、ようやく拳兵の準備を整えた。そして、革命派は計画より二週間遅れて武装行動を始めたのである。

### 3. 2 戦端の経過

東北軍は統一された組織であつたとはいへ、吳大洲など山東人の「護国軍」と自称した部隊が勝手に行動し、五月四日周村を占領したのである。吳大洲の調査によれば、絹産地の周村は山東省「第一の富区」であつた上に、官兵不足のために魅力的な攻撃目的であつたと思われる。濟南に通じる鉄道沿線にあつた周村は軍事的にも要地であつたが、吳大洲部隊は主に略奪を目的としたという批判があり、革命派は本来、周村をすぐ占領する計画はなかつたやうである。薄子明に統率された約二百人は五日周村を占領、村東方の張店をも確定した。<sup>(45)</sup> 二つの部隊はここで郵便局に於いて司令部を設け、吳大洲を督都、薄子明を司令部長にし、その時「護国軍」と自称した。これは恐らく山東省に於ける護国軍の発端であらうと考えられる。<sup>(46)</sup>

ちなみに、「護国軍」は城内銀行を略奪し、商人、住民より現金を徴発した上、「護国軍」の兵士たちは各自略奪

を行つたと言ひ、<sup>(45)</sup>革命軍全体では兵士が分散して、略奪し、規律を守らないことは大きな問題であつたので、革命軍総司令はそれに対して五月二十五日住民及び外国人に対して暴動、略奪を行うこと及び、強買、賄賂などを禁ずる厳格な軍律を發布したのである。<sup>(46)</sup>

周村占領と同時に東北軍の居正派は濰県攻撃を行つた。濰県は濟膠鉄道沿線にあり、萊州灣、罘芝と濟南、青島をも結ぶ交通の要地であり、濰県付近の坊子では日本守備軍が駐屯していた。五月三日青島を出発し、坊子に着いた後、四日に反撃を受けた革命軍は五月五日、四隊に分けて、再び濰県城を攻撃した。革命軍の梯隊はこの時入城しようとし、袁軍の張樹元師長、第五師隊の機関銃攻撃に遭い、濰県城東南の近く東家庄まで退去したが、兩軍はそれから休戦し、交渉を始めた。張樹元は独立を条件として攻撃中止するという革命軍側の提案に同意しながら、一切の武器を革命軍に渡し、「勢力の無い」居正に従属することを拒絶した。しかし、靳將軍は、日本軍が革命派を援助することを恐れて、交渉を続けたのである。<sup>(47)</sup>五月七日第四〇旅長石浦大佐が張樹元を訪問し、官兵暴乱を厳戒するよう請求した。故に張はこの恐れが現実となつたと考え、それを知らされた袁世凱政府遣代理総長曹汝霖は日置公使に石浦大佐が張師長に独立を迫つてゐるという抗議を提出

した。<sup>(48)</sup>

五月八日午前、革命軍の第二支隊が安邱諸城を進撃しに向かい、午後、本隊が再び濰県城を包圍した。同時に張樹元の特使は革命軍本部で居正と会見し、三日内に居正指揮軍と連合し、独立を宣言しようとする約束し、革命軍入城の際、なお堅く奪略を禁止するよう求めたが、革命軍はこの提案を受け入れず、包圍を続け、呂子人部隊が入城し、約法を配布したほか、十日高密・諸城兩県をも攻撃し始めた。その結果、張樹元と居正は十五日、条約を調印し、第五師が一週間内濰県を撤退し、城内を革命軍に譲ると決定した。十五項目の条約はその他に、休戦し、人民の財産を保護し、治安と現状を維持し、電報交通を妨げないことなどを取り決めたが、第一条は第五師團は革命軍が政治を「国利民富主義」に改良しようとしていると認め、遂に全体的に同意を表示すると言つたものの、第十五条は張樹元が要求したように第五師團各隊は提出する際、武器、軍需、軍用機材をすべて携帯することを許可しており、この条約の締結は恐らく一時的な妥協に過ぎなかつたと考えられる。<sup>(49)</sup>その後、三日も経たず、居正派の馬海龍が諸城縣を奪い取り、曹文予が安邱縣、呂子人が高密縣を占領したことにより、張師長は革命軍が破約したと言ひ、撤退を一日延期した。二十四日夜、第五師團全隊及び県知事は北に向

かい退出し、一部は寿光方面、もう一部は芝罘に赴き、張樹元は浦合県で司令部を設けた。そして、二十六日革命軍は入城した上、独立を宣言したのである。<sup>50)</sup>

革命党東北軍はそのほかに山東省東部に於いて若干の要地を占領した後、済南へ進出しようとし、同時に西部に進撃し、昌樂、長山、鄒平、青州、昌邑など済膠鉄道沿線各県を順に占領し、支配したようである。済南市内では既に五月初旬以降銃撃戦が発生し、巡按使行署付近、將軍府付近及び街上各所では破損していた建物もあり、済南開港場と城内の間の交通は遮断され、多くの住民は家族を連れて城内あるいは内地へ避難した。五月七日靳雲鵬將軍や巡按使の家族も天津に逃げたのである。<sup>51)</sup>

更に五月八日、城門は閉鎖になった後、民間各界の代表は会議を開き、靳將軍に革命党との和解を勧告した。同時に文武官吏と緊急会議を行っていた靳雲鵬はこの時、明らかに独立に傾いたが、治安維持のために五月十日戒嚴令を發布した。<sup>52)</sup> 西原によれば、日本商會議員は協議の上、生命、財産の保護及び革命軍兵の活動に関する林領事の意見を尋ね、林領事を通じて石井外相にも陳述書を提出したが、領事館は革命の行動を良く知っていた守備軍が一切領事に通知しなかったので、革命党の行動を事前知ること出来なかつたという。<sup>53)</sup> 日本側は靳將軍の戒嚴令に対し

て、これは外国人居住民貿易營業の自由を妨害するという理由で袁政府に抗議を提出した。

五月二十三日張勳部隊兵士十五營の援軍が済南城に入り、翌日朝まで交戦した結果、二十人近くの死傷者が出て、退去した革命軍は鉄道付属地停車場構内に逃げ込んだが、その内百人が武装を解除したようである。<sup>54)</sup> 十九日靳將軍の代表馬登瀛と革命軍代表の張魯泉は会谈を開始、両軍の進撃を停止すると決議した。次いで靳將軍と周村、濰県の代表は正式に会議を開いたものの、合意できず、中断した。市内に於いては、北京政府に派遣された陳光遠師長の部下より十二師の混成隊が済南に着いた後も両軍の交戦が続いており、特に二十五日夜激戦が発生し、流弾のために再度中国人と日本人居住民の負傷者が出たため、済南市は混乱に陥れた。

袁世凱の養子段芝貴と山東將軍代理を委任された張懷芝は五月三十日、済南城に入ったが、六月六日袁世凱死後、段は猶予せず北京に戻り、張懷芝は革命軍が和平解決を申し出たにもかかわらず、安邱、諸城などの革命軍を攻撃した。それに対して、安邱、膠、昌邑、即墨各県の紳士商總會は新北京政府及び軍務院に交渉を行うよう要求し、北京政府は両軍に停戦を命令した上、善後策を講じるために曲同豊を山東省に派遣した。<sup>55)</sup>

### 3. 3 袁世凱死後の善後策

靳雲鵬など山東省代表が参加した南京會議は内戦停止・自衛政策を採つたものの、山東省では両軍の攻撃停止条約を長く支持することができず、革命軍と張懷芝の部隊は再び衝突することになった。この時參謀長の蔣介石は濰県に到着し、次第に拡大した二万人の濰県部隊は二師と一つの混成旅に改編された。

改編に際して規律を守らない兵士の問題が再発し、趙中玉の部は騒ぎ、反乱したが、朱霽青の部隊に厳しく阻止された。趙中玉は王貫忱に部隊を統率させ、逃亡したらしいが、反乱者と共謀した濰県知事曹汝霖（元第二支隊張）は逮捕された。諸城駐屯馬海龍の部と呂子人の部とは第二師に合編された。馬海龍が去つた時、その部隊は散乱してしまつたが陝西から帰省した劉冠三<sup>(57)</sup>によつて鎮められ、改編を執行することが出来た。七月末、改編が完成されたが、居正が三十一日北京へ行き、日本から戻つてきた萱野も八月初上京した時もお革命軍と段懷芝付属の部隊が安邱県、膠県付近各地に於いて交戦していた。革命軍の呂子人第二師長は段の攻撃に対して、段は破約していると言ひ、新北京司令部長許崇智に抗議を提出したので、許はまず蔣介石を高密県に派遣し、巡視させたが、その後中央の任命

を受けた曲同豊は両軍に停戦を命令したのである。これで、段懷芝部隊と革命軍の衝突が終わるはずであつたといへ、革命軍内部では反乱、賄賂、略奪などの事件が起り、蔣介石によれば、革命軍の財政は困難に落ち、総司令は支配権を持たず、命令を執行するができなかつたといふことから、山東省内の混乱はなお続いたかに見える。

九月二日、ようやく五条の縮編条約が成立した後、曲同豊によつて委任された委員は周村、濰県各地に於いて部隊の縮小を執行した。この時山東に帰つて来た居正及び曲同豊、吳大洲、劉廷漢、陳中孚、鄧天乙、各界の代表者二十一人は濟南の商總會において會議を行い、九月二十一日革命軍東北軍と北京政府軍との平和条約は調印された。しかし、その後軍隊縮小をなおもスムーズに施行できず、曲同豊は新しい命令を請求するため上京したが、北京政府は張懷芝を山東省督都に任命し、軍隊改編するよう命令した。ところが、黎元洪大總統の北京政府の高等顧問に就任した居正の一九一七年一月十五日の報告によれば、張督都は東北軍の総司令を取消し、各機關を解散させ、周村付近に集合した兵士を巡防三營に編成させたといふ<sup>(58)</sup>。また吳大洲、薄子明は張懷芝が山東省を独裁しようとし、陰謀を謀つていふなど、山東省には張懷芝に対する反感が強かつた。吳大洲はこの為に逮捕され、護法軍が挙事した

後、一九一九年獄中で殺害されたのである。薄子明は一九一七年山東護法軍に参加し、その後上海英国租界に逃げていたが、一九一九年六月二十七日上海で殺害された。<sup>60)</sup>

#### 4. 結論

上述した一九一六年頃山東省における歴史的現象を一、辛亥革命時期山東省レベルの民衆運動、二、中国全国の反袁運動、または「第三革命」・「護国運動」、三、袁世凱帝制計画時期および山東出兵の前段階における日中関係、以上の三点に関連して分析してみたい。

山東省では清末民初、民衆運動・暴動が常に発生しており、その要因は帝國主義侵入にもより、商品經濟の發展に伴う社会的矛盾の深刻化にあると思われる。「反官闘争」<sup>61)</sup> Ⅱ「反権力闘争」を行っていた民衆は一方、金融機関、大地主などを略奪した土匪と関係を持っていたが、土匪の活動は住民全体の生活を混乱させ、住民の支持を得なかつた。それはまた、清末民国元年と同様に山東省の権力階層及び立憲派（一九一六年では旧進歩党のほか旧国民党の人物）が北洋軍または袁世凱と妥協し、治安を回復しようとしたことの一要因であると考えられる。

辛亥革命勃発後、山東省では全国各地と同様に独立運動

が展開した。この運動の主体であつた革命派は主に知識人と軍人層の中で影響力を持っていたが、一九一二年十一月十三日、革命派・立憲派が組織した「山東各界連合總會」により宣言された「独立」は二十四日またすぐ「取消」されてしまった。独立運動の失敗の原因は恐らく自己地位保障のため連合總會に参加した保守派によって革命派の勢力が弱体化してしまい、袁世凱が「独立取消」の場合、山東省政府に報酬として五十万兩の軍資金を約束したことから、山東省の紳士・商会・立憲派などは革命維持を取り止めたのである。

一九一六年革命軍による独立宣言が県レベルのみで行われていたが、この場合は同様のパターンが見られる。革命軍に迫られて各県の商会は革命軍との交渉を進め、県知事は「独立」を宣言するが、革命軍が退去する間もなく、「独立宣言」を取消し、これらの「独立宣言」は實際に意味が無かつたようである。土匪を利用しようとした革命軍は蜂起する民衆と協同行動することができず、更に革命派内部の統一は常に欠けている問題もあつた。革命派は特に当初、各派の行動を同調させることができず、革命派の活動の効果は極めて少なかつた。この問題はまた吳大洲・薄子明の部隊が勝手に周村を占領し、「護国軍」と改名し、吳が都督、薄が参謀長と自称した際、はつきり現れてい

る。

ここでは呉・薄らは同一の名称を選んだものの、彼らの部隊は雲南などの「護国軍」と異なっている性格を持って、いたことを指摘しなければならぬ。呉大洲・薄子明は辛亥革命前の中国同盟会員であり、孫文指導下で中華革命党山東省支部を設立した人物であった。しかし、彼らは孫文に派遣された外部の人物ばかりが東北軍を指導することに對して不満を抱いたから、居正派から分離したと思われる。しかし、苦境に陥った靳雲鵬が革命派内部の分裂を利用し、山東省ナショナリズムの名目で呉・薄を寝返らせようとする計画は失敗したのである。また、略奪行為のためあらゆる方面から批判を受けた山東省の「護国軍」や有利な地位にある党派と結託しようとした山東將軍や革命軍の行動・態度を見ると一九一六年山東省に於ける内戦がただの権力闘争に過ぎなかつた可能性は強い。

日本との関係については、革命派には活動を行うために日本の援助、少なくとも日本の黙認が必要であり、革命派は常に日本側の協力を要求したが、日本青島守備軍が革命軍に援助を与えることに對して抗議を提出した山東將軍も日本に「多少の利益」を与えると提案し、日本軍が革命軍に對して取締りを行うよう求めた。日本軍は靳將軍の提案を断つたが、しばしば山東將軍と革命軍との間に調停の役

割を果たしたのである。

ところが、日本軍が革命軍の済膠鐵道利用、兵士の鐵道付屬地へ逃げ込むことを容認し、日本人民間人の革命軍参加を阻止しなかつたことから、青島守備軍は日本の對中国政策と一致している態度を採つたと言える。日本政府は袁世凱に對して好意態度↓中立立場↓反袁政策へ轉換していたが、このことには田中義一・内田良平など対外硬派の影響も重要であつたと思われる。日本政府が一九一六年三月革命軍を交戦団体と認めながら、中立を守ると主張し、日本国内において活動してほしくない「自由民権派支那浪人」を利用してはいたが、彼らが個人として革命軍を援助することに對して責任を取らないという政策を採つたことこそは、日本政府が中国に於ける自己の権力を保持・強化するため、一面では袁政權を打倒しようとしたが、より消極的であつた他の列強と行動を協同できない限り、反袁政策を公然にはせず、矛盾する政策を取り、曖昧な態度を取つたことを示している。

註

(1) 鎌田和宏「護国運動における蔡鏐の役割について」『史潮』

新三十号、一九九二年、六六―八一頁、七二頁

(2) 鎌田氏は護国運動の評価・研究史を詳細に紹介しているの

で、ここで省略することにした。

- (3) 臼井勝美『日本と中国』(原書房)一九七二年、五七頁
- (4) 『中華革命党の研究』、六〇—六一頁
- (5) 十月三日の会議は軍人資格、日本軍入軍様式を論じ、十月十四日の会議のテーマは軍用公文であった。周応時は十二日二日の会議で陸軍部官制について報告し、十二月五日、総督府軍政部条例草案を紹介した。同会議、王統一は海軍部官制度について報告した。『革命文獻』中国国民党党史史料編纂委員会編、台北、一九六九年、第四十五卷、二一—二五頁
- (6) 各省の司令官：浙江省 夏爾、江蘇省 周応時、福建省 黃國華、広東省 鄧鏗、雲南省 鄧泰忠、湖南省 林德軒、四川省 盧師諱、湖北省 蔡濟民、安徽省 張匯韜、江西夏之麒、貴州省 凌霄、広西省 劉幅『居覺生先生全集』一六二頁より
- (7) 崎村義郎『蒼野長知伝』、未公開、六二六頁
- (8) 東北軍の各支隊の司令官：第一支隊 薄子明、第二支隊 馬海龍、第三支隊 呂子人、第四支隊 杜仲三、第五支隊 趙中玉、第六支隊 尹錫五
- (9) 梅屋庄吉、一八六八年長崎生まれ、写真、活動写真業の先駆者、アモイ、シンガポール、香港で写真店、映画館経営、一八九七年から宮崎滔天と関係を持っており、中国革命運動を財政上に援助した。一九〇九年日本でM 百代商会という日本第二の映画制作会社を創立し、一九一一年辛亥革命を記念する映画を撮影させた。孫文と宋慶齡は一九一五年梅屋の自宅で結婚式を挙げ、梅屋は同年「日本活動写真株式会社」(日活)の創立に参加したが、二ヵ月後「日活」から退出した。
- (10) 周応時、?—一九三〇年、江蘇江陰県人、辛亥前日本留学、名古屋歩兵第三十三連隊見習候補生、陸軍士官学校卒業。辛亥革命後第十七協一等參謀官、一九一二年陸軍將。第二革命に参加しており、失敗後日本へ亡命した。一九一四年、中華革命党の軍事部部长兼大森浩然盧軍事学校教官、十一月上海に帰り、拳兵計画に参加した。袁世凱死後、陸軍諮議官を任ず。一九一七年段瑛瑞によって国軍總司令官を委任されたが、早く辞職し、七月広州大元師府參軍長兼陸軍部軍務士官長。翌年七月広州軍政府参加し、一九二五年より軍總司令官就任。一九三〇年三月江蘇省政府参加、同年病死。『戦事後方勤務全書』がある。
- (11) 『革命文獻』中華革命党党史史料編纂委員会編、台北一九六九年、第四十六卷、四七九頁
- (12) 坂本、一九一六年五月十二日、二十四日梅屋宛書簡、「梅屋関係史料」東京大学法学部保管
- (13) 外交資料、「各国内政関係纂・支那の部(亡命者を含む)」第十八巻、一九一六年六月二十八日、兵庫県知事外務省宛の報告
- (14) 夏重民は八日市飛行学校の学生であり、全学生代表でもあった。

中国の第三革命と日本——一九一六年山東省における反袁運動を中心に——

(15) 『革命文獻』四六、四八〇頁

(16) 車田讓治『國父孫文と梅屋庄吉』、一九七五年、三一九頁

(17) 外交資料、「袁世凱帝制計畫、別冊、反袁動亂雜件の部」第一卷の第十一件「飛行機購入關係」

(18) 『革命文獻』四六、討袁資料一、「山東革命黨討袁史略」、二四〇—二六二頁

(19) 萱野長知「濰県ニ於ケル革命軍行動計畫」、一九一六年四月、宮崎世龍氏の写しより。萱野長知の未亡人は萱野が扱っていた中国革命關係資料を終戦後、某中国人に売ったが、宮崎世龍氏はこの資料を朝日新聞の緒方竹虎に頼まれて写し、一九九二年初頭、久保田文次氏に渡すまで、扱っていた。この資料の主な部分は孫文關係の電報、書簡などであるが、中には萱野宛書簡のほかに、山東省諸城県人。辛亥革命後、

(20) 吳大洲、?—一九一九年、山東省諸城県人。辛亥革命後、一九一二年一月王長慶等が諸城で山東軍政分府を組織した時、吳は刑務所長を就任した。一九一三年八月、二次革命参加失敗後、日本へ亡命したが、やがて大連に戻り、薄子明等と共に中華革命党山東支部を設立した。その後、烟台警察庁長に就任したようである。一九一六年山東拳兵参加、「護国軍」を組織した。薄子明、?—一九一九年、山東省日照県人。十七歳の時山東陸軍小学校入学。一九一二年山東省軍官養成所に入った。二次革命失敗後大連へ渡り、一九一五年から討袁運動に参加した。一九一七年、護法運動に参加し、上海へ逃げたが、一九一九年六月二十七年上海で殺害された。

(21) 西原亀三『夢の七十余年』北村敬直編、一九六五年、八七、一〇二頁

(22) 浅倉平、一九一六年八月九日田中義一宛書簡。山口利明

「浜面又助文書—中国第三革命と参謀本部」、『年報近代日本研究』第二、一九八〇年、二〇五—二七〇頁、二六四頁より引用

(23) 同上、二二〇—二二二頁

(24) 同上、二二七—二四一頁

(25) 外交資料、「袁世凱帝制計畫、別冊、帝国の政策」、一九一六年三月七日

(26) 外交資料、「袁世凱帝制計畫、別冊、帝国の政策」、一九一六年五月十日

(27) 田中義一、一九一六年五月中旬森岡宛書簡、前掲山口利明、二五三頁より引用

(28) 在青島守備軍参謀長一九一六年四月二十五日参謀次長宛の電報によれば、山東將軍は二十三日貴志大佐を招き、時局問題について語ったという。外交資料、「袁世凱帝制計畫、別冊」第十一卷、同上、第十四卷、在濟南林久次郎領事、一九一六年五月十七日石井外相宛電報

(29) 劉大同、一八六五年—一九五〇年、山東省安丘県人。興中會、中国同盟會参加し、一九〇九年吉林省安図県第一県知事を就任し、教育及び地方実業の発展に努めた。一九一五年から討袁運動で活動した。一九二五年上海で『野語』雑誌経営、日中戦争直前、天津フランス租借地『渤海日報』経営し、長期間天津で居住した。一九五〇年濟南で病死した。沈曼雲、一八六九—一九一五年、一九一〇年中国同盟會参加、翌年六月中国国民総会会長、一九二二年四月孫文が中華実業銀行を組織した時、沈は籌備に就任した。一九一三年五月この銀行

が上海で設立された時、總經理したが、後日中合作の中国興業会社の籌備員になった。同年、二次革命失敗後、大連へ渡り、一九一五年七月病死。

- (30) 靳雲鵬、一八七七年—一九一五年、山東省濟寧県人。一九〇二年、袁世凱が保定で北洋軍政指令を設けた時から北洋軍参加。一九一一年昆明で第十九鎮總參謀官を就任し、雲南で新軍蜂起が発動すると、湖北へ逃げ、清軍第一軍總參贊官になった。一九一三年八月山東省臨時都督となり、九月山東都督を就任し、翌年六月、同省の將軍になった。一九一五年十二月、一等伯爵を授与された。一九一六年三月北京政府參戰監督軍務所參謀長を就任し、翌年一月陸軍總長に。

(31) 『革命文獻』四六、二六六頁

(32) 外交資料、「袁世凱帝制計畫一件、別冊」第一卷、一九一五年十二月六日、南京発

(33) 外交資料、「袁世凱帝制計畫一件、別冊」第一卷、一九一六年一月二十八日、青木發總長宛

(34) 外交資料、「袁世凱帝制計畫一件、別冊、反袁動乱及び各地の状況」第四卷、林久治郎發外務省宛、一九一六年二月十七日

(35) 同上、在支那駐屯軍司令官發參謀總長宛、一九一六年三月二日

(36) 同上、林久治郎發外務大臣宛、一九一六年二月二十八日

(37) 同上、第八卷、林久治郎發外務省宛、一九一六年四月十日によると、呂子明は山東省即墨県人、清代の土匪であり、辛亥革命の時徐州で代三十九旅充當副官であった。

趙中玉は山東省青州寿光県人、青州中学堂の学生であったが、

史苑（第五四卷一号）

後土匪になった。尹錫五は元來「閩外」の土匪であったといふ。

(38) 吳大洲の報告によれば、革命軍の勢力は次のようである：

海州 李佩蓮等、部下四五千人、吳某係の民團千余人

沂州 薄子明、部下二三千人、駐紮沂州城内外の巡防營

兗州 劉毓斗等、部下三四千人

徐州 龍の旧部三四千人、江防と連絡がある

曹州 尤超凡屬五六千人、呂某の旧部下巡防營

東昌 尤超凡屬の旧部千余人、吳某の巡防營

青州 鄧天乙、趙中玉の部下千余人、王公爽、杜鴻遠五六百人、張香坂、魏子莊の部下五六百人

登州 文登、榮城等の諸縣で五六百人

『革命文獻』四六、二七九—八〇頁

(39) 外交資料、「袁世凱帝制計畫、別冊、反袁動乱及各地の状況」第六卷、天津支那駐屯軍司令官、一九一六年三月二十二日總長宛

(40) 同上、第七卷、林領事、一九一六年三月二十九日外務大臣宛

(41) 同上、第九卷、青島守備軍參謀長、一九一六年四月十三日總長宛。第十卷、林領事、四月十八日外務大臣宛

(42) 『革命文獻』四六、三一—一頁。外交資料、「袁世凱帝制計畫、別冊、反袁動乱及各地の状況」第十一卷、日置公使、一九一六年四月二十日外務大臣宛

(43) 同上、林領事、一九一六年四月二十五日外務大臣宛

(44) 『革命文獻』四六、二六一—一頁

(45) 西原龜三『夢の七十余年』九三頁と『山東近代史資料』中

中国の第三革命と日本——一九一六年山東省における反袁運動を中心に——

国史学会濟南分会編（山東人民出版社） 濟南、一九五八年第二分冊、三四一頁

(46) 『革命文獻』四六、二八六頁

(47) 靳將軍が交渉したのは旧進歩党人の安鵬東、丁堯鐸、旧国民党の王朝俊、安善圃であった。

(48) 外交資料、「袁世凱帝制計画、別冊、反袁動乱及各地の状況」第十二卷、林領事、一九一六年四月二十七日外務大臣宛

(49) 『革命文獻』四六、二五二頁

(50) 外交資料、「袁世凱帝制計画、別冊、反袁動乱及各地の状況」第十四卷、国民外交同盟会著「支那近況報告」の第三「山東討袁軍の実情」一九一六年五月十日

(51) 『革命文獻』四六、二六六頁

(52) 外交資料、「袁世凱帝制計画、別冊、反袁動乱及各地の状況」第十三卷、天津電報、參謀總長宛

(53) 同上、林領事、一九一六年五月十日外務大臣宛

(54) 西原亀三、前掲、九一頁

(55) 西原亀三『夢の七十余年』九二頁と外交資料、「袁帝制計画、別冊、反袁動乱及各地の状況」第十四卷、林領事、一九一六年五月十七日外務大臣宛

(56) 『革命文獻』四六、二六九頁

(57) 同上

(58) 同上、二五六頁

(59) 同上、四六、居正「山東善後情形報告（通告第二五号）」、三二八頁

(60) 『民国人民大辞典』徐友春編、（河北人民出版社）石家荘、一九九一年

(61) 内山雅生「民国初期の民衆運動——山東省の場合——」、野沢

豊、田中正俊編『講座中国近現代史／第三卷』（東京大学出版）一九七二年、一九五—二七頁、二二一頁

(62) 西原亀三と『山東近代史資料』第二分冊、王遂善「古愚軒痛定思」、三四二—三八〇頁